

学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

研究主題

情報を的確にとらえる力（思考力・判断力），表現する力を育てる

宿毛市立片島中学校

実践概要：

「情報を的確にとらえる力（思考力・判断力），表現する力を育てる」ことを目指し、課題解決型の授業の実践研究を進めた。特に教員の授業に対する意識の向上を図るために、授業を検証する「三つの柱」と「八つの視点」を全教科で共通確認し、教科部会で授業づくりを行った。検証の柱と視点に基づいた教科部会を定期的に行い、授業について話し合う基盤をつくり、協議の活性化につなげることができた。

また、より探究的な学習の推進に向けて図書館資料等の活用についても研究を進めた。学校図書館教育計画を見直し、図書館資料を活用した授業の実践を図った。校内の各階に図書スペースを設け、公立図書館から借りた図書資料などを設置して、図書館資料の活用の促進に繋げた。

考えを深め、適切に表現する力の育成に向け、計画的、組織的な「学校新聞づくりコンクール」への取組及び小社会ノートの効果的な活用についての研究等に取り組んできた。

キーワード： 課題解決型の授業、図書館資料の活用、図書環境の整備

1. 研究仮説

(1) 学校組織全体で、読解力を育むための授業づくりを研究・実践することにより、各教科等の指導力向上と生徒の教科等横断的な読解力の向上が図れるのではないかと。

(2) 学校図書館教育計画を作成し、図書館資料や新聞等を計画的に活用することで、全教員が学習全体の見通しをもち、生徒に何をどのように学ばせ、どのような力を育成するのか等、明確な目的意識をもつことができ、また、そうすることで、生徒が課題解決を行う際に、主体的に必要な情報を整理し、考え、表現する力を育成することができるのではないかと。

(3) 新聞づくり活動等を通して、関連する多くの情報を集めることから始め、自分の考えをまとめて書く活動を意図的に設定することで、考えをより深め、適切に表現する力を育むことができるのではないかと。

2. 実践方法

(1) 各教科における「情報を的確に捉える力」，「表現する力」の育成を目指した授業づくりの実践研究

①教職員全体で目指す学習の方向性を確認し、学校全体で課題解決型の授業づくりを行った。週に1回の教科部会の中で、授業の検証軸に沿って事前・事後協議を行い、PDCAサイクルを意識した授業づくりを進めた。

②各教科及び総合的な学習の時間の公開授業を実施した。全教員が1回ずつ公開し、令和元年度1月に複数教科で研究発表会を実施した。

③学校図書館や新聞等を活用した課題解決的な学習の実践に向けて、学校図書館年間計画を作成し、図書資料等の活用を進めた。校内の各階に図書スペースを設け、授業に関連する資料を配置し、活用を図った。

(2) 新聞活用及び新聞づくりを通じた実践研究

①毎朝10分間の朝学習の時間に「小社会ノート」を用いた視写学習を行い、目的に合わせて文章を要約する力の育成を目指した。

②全校体制で新聞づくり学習を行い、各学年で総合的な学習の時間に学んだ内容を新聞にまとめた。文化祭で、保護者の方と地域の方が審査を行い、「学校新聞づくりコンクール」代表作品の選出を行った。

3. 実践内容

(1) -①

平成30年度の評価委員訪問の際に、対話を通して問題を解決していく学習過程を描くことに課題が見られるとの指摘をいただき、生徒が主体的に学びに向かう課題解決型の授業づくりに向けた課題設定の在り方について助言を受けた。そこで、校内研修で授業における目指す生徒の姿を共有し、探究的な学習の方向性を確認した。目指す生徒の姿として、「自ら課題に向かい、情報を活用し、解決しようとしている

〈主体性〉」姿と「自らの考えを整理しまとめようとしている〈表現力の向上〉」姿の2点に絞り、教科部会で研究主題に迫る学習について実践と協議を重ねた。

授業づくりを行うにあたり、定期的に教科部会を実施した。平成30年度は国語、社会、数学、理科、英語、及び技能教科（音楽、技術家庭科、美術、保健体育）の6部会で実施したが、令和元年度は各教科の人数配置の関係から、国語、数学+技術、英語、社会+理科、音楽+家庭+保健体育の5部会で実施した。教科部会での取組の中心は、「見合う授業」の事前・事後協議である。「見合う授業」とは、平成30年度の評価委員訪問での助言を受けて、各教科部会のなかでお互いに授業を見合い、授業の検

証軸に沿って反省と改善を重ねていく取組である。平成30年度は各教科部会で必要に応じて会をもっていたが、令和元年度は週に1回のペースで会を設定した。

授業づくりを行う際、以下に示す授業の検証軸である「三つの柱」と授業づくりの「八つの視点」を意識した。

授業の検証軸である「三つの柱」は平成30年度12月の評価委員訪問を受けて、より探究的な学習を進めるために設定した。また、令和元年度6月の評価委員訪問を受けて、さらに具体的な視点で授業づくりを行うために、授業づくりの「八つの視点」を授業の検証軸（「三つの柱」）を踏まえて設定した。

三つの柱

- ①教師は生徒の主体的な活動を保障していたか。
- ②生徒は情報を的確に捉え、思考につなげていたか。
- ③生徒は自分の考えを整理し、自分の言葉で表現できていたか。

八つの視点

- ・本時の目標、見通しが示されていたか。 (①)
- ・生徒が興味・関心をもてる課題設定であったか。 (①)
- ・個々の生徒に「思考・判断」はあったか。 (②)
- ・生徒同士の対話的な学びはあったか。 (②)
- ・考えを可視化して話し合っていたか。 (②)
- ・生徒が論理を説明する場があったか。 (②)
- ・情報から読み取ったこと、情報から関連付けて考えたことを言語で表現する場があったか。 (③)
- ・本時の学習の振り返りはあったか。 (③)

(1) - ②

平成30年度は、各教科及び総合的な学習の時間の公開授業を年間3回（6月、10月、1月）に分けて実施した。10月及び1月の公開授業については、評価委員からの助言を生かし、研究の方向性を全体で確認し、取組を進めた。令和元年度は6月と12月の評価委員訪問と1月の研究発表会を含めて、年間7回（6月、7月、10月、12月、1月）に分けて実施した。公開授業を行う際には、授業者が参観してほしい視点を示し、協議の視点を絞って事後協議を行った。公開授業後にはKJ法を用いて事後協議を行い、協議内容は一枚のシートにまとめて回覧し、共有を図った。

(1) - ③

本校の学校図書館は、各学年の教室から遠くに位置しているため、どの学年も図書を活用しやすいように、各階に図書スペースをつくり、新聞や各教科等の関連資料、学校図書館の図書を設置した。

また、図書館資料が限られており、授業のねらいに即した資料が少ないために、公立図書館と連携し、教科に関する図書を借り、図書スペースに設置した。図書館資料の他に、授業での

成果物や作品も展示し、学習スペースとしての活用も図ることで、生徒の図書スペース利用に繋がった。

(2) - ①

情報を読み取り、整理し表現する力の育成を目指して、平成30年度より毎朝10分間の学習の時間を利用して「小社会ノート」を用いた視写学習を始めた。平成30年度は1週間で一つの記事を視写し、記事に対する感想や記事の要約などに取り組んだ。令和元年度は、より細かな指導を行うために、2週間に一つの記事を視写するように変更した。また、学習の進め方も以下のように変更した。

〈平成30年度の取組方法〉

1. 記事を読む。
2. 視写する。
3. 残りの時間で語句調べと感想・要約文、タイトルを書く。

〈令和元年度の取組方法〉

1. 記事を読む。
2. 語句を調べる。
3. 感想・要約文を書く。
4. 記事にタイトルを付ける。
5. 視写する。

取組期間を2週間に変更したことで、細かな指導を行う時間の余裕が生まれ、生徒同士で要約文や感想を読み合う姿が見られた。また、取組方を変更したことで、意味が分からない語句を調べる習慣が付き、より正確に記事の内容を理解できるようになった。また記事を要約することや記事に対して感想をもつことに生徒の意欲が高まった。

(2) - ②

平成30年度の夏期休業中に高知新聞社の記者を講師として招聘し、はがき新聞の書き方の基本について教職員対象の研修を実施した。身近な話題をテーマとして全員ではがき新聞を作成し、それぞれの作品に対する感想を共有することを通して、新聞づくり活動の目的を教職員全員で確認した。

令和元年度は、平成30年度の取組を踏まえ、総合的な学習の時間のまとめとして、1年生「地域の調べ学習」、2年生「職場体験学習」、3年生「福祉体験学習」について新聞を作成した。できあがった新聞は文化祭で展示し、保護者、地域の方々を審査員として校内審査を行い、選出された作品を「学校新聞づくりコンクール」の学校代表作品として出品した。

4. 成果と課題

○学力の向上について

学校図書館や新聞等の活用、課題解決型の授業を目指す各取り組みを実施することで、生徒の思考する場面や表現する場面が増えたことにより、以下の各学力調査の結果に成果と課題が見られた。

【平成31年度全国学力・学習状況調査】

全国比 国語 (+6.2) 数学 (+15.2)
英語 (+5.0)

国語では、授業中に班やペアでの集団解決の場を設定したことにより、「話す・聞く」分野の正答率が上昇した。しかし、記述式の問題には弱さが見られた。授業中や家庭学習など、まだまだ文章を書く機会が少ないことが要因の一つではないかと思われる。また、自分の考えを表現することを苦手とする生徒が多く、授業の中でも他者の考えをそのまま写していることが多いことも要因の一つだと考えられる。

数学では、授業の中で数学术語を用いてまとめることや振り返りの重要性を意識させていることにより、図形の証明や式による説明の問題の無解答率が低く、事象を数学的に捉え、説明する力は付いていると考えられる。それに対して、「資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する」問題や「反比例の表から、 x と y の関係を式で表す」問題で正答率が低かったことから、身近な事象を見方・考え方を働かせ、数学的に表現する力が弱いと考えられる。また、表やグラフからそれぞれの事象に即して解釈する力が弱いことが分かる。授業中に学んだことを身近な生活とつなげて考えることができるようにまとめや振り返りに工夫が必要である。またグラフや表などからの情報の読み取りを授業に積極的に取り入れていかなければならない。

英語では、資料活用の授業を実施したことや、日々の英文読解の積み重ねにより、「読む」分野の正答率が高く、初見の文章から必要な情報を読み取ることができていた。しかし、記述問題に課題が見られる。「書かれた内容に対して、自分の考えを示すことができるよう、話の内容や書き手の意見などをとらえる」問題の正答率が低く、情報の読み取りが不十分であり、自分の考えを示すだけの語彙と生活体験も不足していると考えられる。

【令和元年度高知県学力定着状況調査】

1年生

全国比 国語 (-5.6) 数学 (-4.8) 英語 (-3.2)
理科 (-1.4) 社会 (-5.4)

全ての教科で全国値を下回る結果であり、学力の向上を目指し、基礎的な知識・技能の定着と知識・技能を活用することができる資質・能力の育成に向けた取組を工夫、改善する必要がある。

数学では、問題解決の方法を数学的に説明することができており、数学的な表現を用いて説明する力が身に付いてきたことが成果である。

理科と社会では、短答式の知識問題の正答率が高く、基礎的な知識の定着には成果が見られた。生徒の日々の家庭学習での自主学習の取組が要因と考えられる。しかし、複数の資料から情報を読み取る問題や自分の考えを書く記述式の問題には課題が見られた。授業の中で一つの資料から情報を読み取る活動は進めてきたが、複数の資料から読み取った情報を関連付けて考える学習はまだ不十分であると考えられる。

2年生

全国比 国語 (-5.3) 数学 (+0.6) 英語 (-6.8)
理科 (-1.6) 社会 (-14.5)

全体的に目標値は達成できておらず、特に社会では全国値を大きく下回る結果となったが、平成30年度の結果と比較すると全国との差は縮まっており、各教科において努力が見られる結果ではあった。

英語では、複数の資料であっても比較的短い文章であれば情報の読み取りができることが分かった。

社会、数学、理科においては資料から情報を読み取ったり、資料の傾向を読み取ったりすることに課題が見られた。

各教科共通の課題として、記述式の問題の正答率の低さが挙げられる。各教科において複数の資料を用いた授業を行い、情報の傾向を読み取り、精査・分析することの学習を進めなければならない。また、自分の考えをしっかりと最後まで表現させることも各教科共通して取り組む必要がある。

本事業の取組の成果として、生徒の活用力が向上したことが挙げられる。1年生の令和元年度高知県学力定着状況調査から、国語、社会、数学、英語の4教科で基礎的な知識を問う問題の正答率より活用力を問う問題の正答率が高いという特徴的な結果が得られた。思考力や判断力、表現力の向上を意識して課題解決型の授業づくりに取り組んできた効果であると考えられる。その反面、基礎的な知識を問う問題の正答率は上記の4教科で全国平均正答率を下回った。思考力や判断力、表現力の向上と共に基礎的な知識技能の定着を図る取組を進めなければならない。

○指導力の向上について

年間3回、学期末に生徒と教員に対して行った授業力チェックシートの結果から以下の成果と課題が見られた。

〈生徒結果より〉

学期によって若干の数値の変動はあるが、どの項目も90%前後と高く保たれており、授業において、めあてを意識しながら主体的に課題に向かい、考えを交流する姿勢を身に付けるなどの成果が見られた。しかし、項目7の図書館や資料の活用に関する質問の肯定群は80%前後と他の質問に比べて低く、情報を活用して課題解決を進めることに課題が見られる。図書館や図書館資料を活用した授業づくりが行いやすい教科とそうでない教科があったため、教科ごとに資料活用の頻度に差があったことが要因と考えられる。

〈教員結果より〉

年度当初から年度末にかけて、ほぼすべての項目で数値が上昇した。特に、「授業構成」では+0.4「指導技術」では+0.5上昇しており、授業づくりに対する教員の意識の向上が見られる。目指す学習の方向性を確認し、教科部会で授業について実践と協議を重ねた成果だと考えられる。